

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

平成20年8月4日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 人間・環境学研究科

職 名・学 年 博士後期課程3年

氏 名 徐 玉 子

事 業 区 分	平成20年度・国際研究集会派遣助成		
研究集会名	第10回国際女性学大会		
発 表 題 目	My vagina belonged to the state'; Narrative of former prostitute for U.S. military stationed in South Korea		
開 催 場 所	スペイン・マドリードコンプルテンス大学		
渡 航 期 間	平成20年7月3日 ~ 平成20年7月9日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 有(領収書・参加証明)		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	200,000 円	
	使用した助成金額	200,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	航空券購入	197,700円
		研究大会登録費	25,205円 (150Euro)

成果の概要

報告者：徐玉子

派遣先 第10回国際女性学大会
開催期間・場所 平成20年7月3日～平成20年7月9日(7日間)
・ スペインのマドリド
発表題目 「私の性器は国のものだった」; 在韓米兵相手の元売春女性の語りから
'My vagina belonged to the state'; Narrative of former prostitute for
U.S. military stationed in South Korea

<はじめに>

このたび私は、京都大学教育研究振興財団の援助を受け、第10回目の国際女性学大会(10th International Interdisciplinary Congress on Women)に参加し、研究発表を行うことができました。以下にその報告をいたします。

<国際女性学大会について>

国際女性学大会は3年毎に開催される大規模な国際学術大会です。学問的なジェンダー研究に焦点を当て、世界優秀大学と専門研究所、国際機構、NGOなどに従事する多様な分科の女性学者、女性運動家、女性政策関連者たちが参加します。政治、経済、社会、文化などのすべての分野にわたり、公的・私的領域においてローカルとグローバルな次元で展開されている諸現象をジェンダーの視点から再視し(re-view)、再考し(re-think)、再解釈し(re-interpret)、再定義し(re-define)、再構築(re-construct)することを目的にしています。この大会は1981年に36カ国の代表623名が参加した第1回目のイスラエルの大会から始まり、2008年の第10回目のスペインの大会には100ヶ国余りの代表3,000余名が参加しました。次回第11回目の大会は2011年カナダで開催される予定です。

<大会の内容について>

本大会は、Universidad Complutense Madridの主催で、スペインのマドリドで行われました。Equality is not a Utopia というスローガンを掲げて、あらゆる分野での両性平等な社会を実現することが、ただユートピアとして憧れるべきものではなく、今世紀のフェミニズムの実質的な可能性であることを確認する大会でした。世界各地から集まった参加者は、48の多彩なテーマを取り上げた集中討論プログラムと、13の領域(Feminisms and Social Movements, History, A Different World, Economics, Political and Legal Action, Territories and Environment, Dislocations and Frontiers, Human Rights, Communications and the Media, Science and Technology, Culture, Creativity and Art, Education, Health)に分かれた600余りのレギュラー・セッションを通して、女性の政治的・法的権利、都市空間の不平等、人権闘争、そして、グローバル化が女性の生に与える影響など、多様な分野に関して議論を行いました。特に、グロー

バル化により空間的、社会・文化的な境界の移動がたやすくなった現在、その影響により女性の生は根本的に揺るがされ、変化しているところが注目されました。グローバル化の現象は、以前存在していた境界を崩すとともに一方では新たな境界を障壁として作り上げたりする中で、女性に対する新たな暴力を生み出します。本大会で、国際人身売買などの女性の移住の問題をはじめ、グローバル化が女性の生に付加する具体的な暴力について深く議論が行なわれたのは、それが新たに解決すべき女性の重要な課題として登場してきたためだと思われます。

< 研究発表について >

私は、2005年からは韓米軍基地周辺の村で米兵を相手に行われる売春をめぐる研究を進めてきています。長期の現地調査をもとに売春女性たちのライフ・ヒストリーを収集し、それらの語りから浮き彫りになるナショナリズムとジェンダーやセクシュアリティ、そして、軍事主義などが錯綜しながら作り上げている現実について論じています。

今回の発表の目的は、朝鮮戦争の時期から1980年代後半までの間現役として米兵を相手に売春をしていた、現在は主に60、70代の韓国女性たちの経験の語りをもとに、売春女性は社会構造の犠牲者であるという表象に対して彼女たちの行為主体性を認める視点を提示することによって、従来の女性の犠牲者化の言説を是正するところにあります。

1945年米軍が日本植民地からの解放軍として韓国に入ってから基地村は全国に形成され始め、朝鮮戦争で夫や両親を失った女性や孤児たちが生計を維持するために流入し、最後の手段として売春を選択する人々も現れました。米兵相手の基地村の売春は、1960年代から始まった売買春行為を取り締まる法律から例外とされるだけでなく、一般の韓国人相手の売春女性より高い頻度と強度で性病検診を強制されるなど、国家によって売春行為を許容されながら同時に厳しく管理された側面がありました。それは、国家の外貨獲得という目的と、性病伝染から米兵を守りながら性的に満足させることで撤退しようとする米軍の継続的な駐屯を促すという目的のためであったと思われます。「私の性器は国のものだった」という語りは、これらの国家の思惑に対して発せられた女性たちの認識であると同時にそれへの辛らつな批判でもあります。

今回の私の研究発表は7月7日午後3時からのA Different World領域のSexualitiesのセッションで行ないました。今回の国際学術大会では、あまり知られていない韓国での米兵相手の売春の実態を報告することによって、東アジアの安保や在外国米軍基地の存在とローカルの女性の生の関連性を国際的に喚起させることができたと思われます。

< 謝辞 >

本大会に参加することで、多くの研究者と関心分野について議論することができ、ネットワーク作りも可能になりました。このような素晴らしい機会は、貴財団の援助によって始めて可能となったものです。ここに深く感謝いたします。